

広島大学学術情報リポジトリ
Hiroshima University Institutional Repository

Title	日本の若者とその生活様式
Author(s)	ガビン ポフリ, ; カール ジロウ ロック,
Citation	日本語・日本文化研修プログラム研修レポート集, 18期 : 139 - 163
Issue Date	2004-03-31
DOI	
Self DOI	
URL	https://ir.lib.hiroshima-u.ac.jp/00038861
Right	
Relation	



日本の若者とその生活様式

ガビン・ポフリ
カール＝ジロウ・ロック

はじめに

僕達のこのレポートは単なる好奇心から生まれたものとも言えるかもしれない。他国の同じ年代の人がどう生きているか、自分とはどう違うかを知りたい気持ちから始まった。2人ともヨーロッパの地で育ったが、この日本という国とのつきあいはかなり長いものだ。その中で当然日本と自国、そして世界の国々の人と社会を観察し、比べてきた。または社会学者としてその同じ点と違いの由来を調べて、理解しようとしてきた。学問としてだけでも十分に面白いけれど、日本の社会に滞在する僕達にとってはよりリアルで、より自分に近いものである。ある意味でうまく日本の社会に参加しなければいけないという必然性があったわけだ。

レポートの目的と方法

1. 目的

その中でも、一番興味深いグループかつ僕等に一番よく見えるのはもちろん同じ「若者」だ。そして今この機会を生かして、身の回りの日本の若者をさらに調べて、その結果から出るいくつかの面白い点を纏めて、ここで発表したいと思う。

それにもう一つの目標がある。最近のマスコミにも、学界でも日本の若者に関する議論が多い。殆どが批判論や何らかの社会問題に繋がるものである。少年犯罪や不登校、援助交際、またはもっと抽象的なモラルの衰退などは飽きる程耳に入っている。しかし自分の目で見れば、日本の若い人が皆駄目で社会のシステムが根本的に歪んでいるというのはいかにも信じがたいものだ。だからこの研究を通して、メディアの映る惨めなイメージは実際にどれくらい当たっているのかを明確にしたい。つまりこのレポートの目標は二つ

今の日本の若者の生活様式を具体的に示すこと。

少年犯罪、モラル衰退などの若者に関する社会問題はどれくらい見えるかを察すること。

2. 研究の仕方

第一に僕は若者を対象にアンケート調査を行う。アンケート調査の結果をレポートの主な出所にするため、一人より二人でアンケートを配って情報を集める方が有利だと思い、二人で共同のレポート研究にする。当然ながら、共同の研究にした第一の理由は研究のテーマにお互いに興味を持っていたからである。

それで生活の中の活動の内容と頻度、時間の割合などを聞く。それからアンケートで集めた情報を纏め、分析し、そして最後に具体的な生活パターンを描くことが出来る。このような実用的な情報とともにアンケートの回答者から自分の生活についての意見と感想をも聞き出す。あとはアンケートでは書いてもらにくい感想のようなものも何人かのインタビューで聞くことにした。次に最近のマスコミに取り上げられる幾つかの社会問題を取り上げ、調査で分かったことを中心に論じる。

3. 若者の定義と研究の前提

僕はこの研究、特にアンケート調査のために「日本の若者」を「16才以上30才以下の現在（2003年）日本で生活している人のこと」と定義する。どうしてこう決めたかという、まずは15才までは義務教育を受けなければいけないという日本の法律があるということだ。厳密に言えば20才未満の人は法律から見れば未成年である。最低20才からにしようかとも考えたが、やはり子供や未成年は若者とは違う。最高年齢を30才にしたのはもっと非合理的だった。「若い」はいつまでかというのは非常に難しい哲学的な問題で人の感覚によって全然違う。でも区切りがどうしても必要なので結局20代と30代の境目にした。

注：「日本で生活している人」は必ずしも「日本で生まれた人」でも「日本人」でも「日本国籍を持っている人」でもない。国に住んでいることだけでその国の社会の一部になるので。

. アンケート調査の結果の分析と結論

1. アルバイト

このテーマについては、アンケート回答用紙で、質問「1」にした。日本で学費も生活費も高いし、若い人は色々なものが欲しいので、アルバイトをするのは当たり前かもしれない。親がお金を送る習慣があるが、これが足りなかったり、自分で稼ぎたかったりすることがよくある。調査の結果を見ると8割の回答者はアルバイトをしていることが分かる。一番よくアルバイトをするグループは大学生と言ってもいいだろう。それ以外の回答者が少なかったが、高校生の間にもしている人が多い。フリーターは言うまでもない。

働く時間と言えは週11時間から15時間まで働いている人と16時間以上働いている

人が多かった。大体のアルバイトの給料は低いものだからこれくらい働かないと意味があまりない。家庭教師などの給料の高いアルバイトをしている人はより少ない時間でよい。この人たちは自分をラッキーと思っているかもしれない。週1時間から5時間まで働いていると答えた6人の中の5人は家庭教師か模擬試験の採点の教育系のアルバイトをしていることはこのパターンに合っている。

一番人気のあるアルバイトじゃないかもしれないが、一番よくしているタイプは居酒屋、レストランなどの飲食店。次いで店の店員。割合はこういうサービス系のアルバイトが圧倒的に多い。肉体労働やビジネス系のアルバイトをしている人が調査のサンプルに一人も居なかった。大学生と女性が大半を占めていることの影響かもしれない。

生活の感想を述べるところに「アルバイトの給料が不満」と書いた人が何人かいた。それでもたくさんの人は「アルバイトをしたい」や「もっとしたい」などを書いた。やっぱりお金がないと苦しいからほとんどの若者はアルバイトをした方がいいと思っているようだ。

2. 勉強

2. 1 概観

このテーマについては、アンケート回答用紙で、質問「2」にした。「常に何かを勉強しているか」という質問に、「している」と答えた人は、アンケート調査対象の54人中で、半分の27人だった。従って、「していない」と答えた人も同じく、27人だった。「常に何かを勉強する」と言えば、それは例えば学校の勉強や就職資格の勉強など」とはっきりアンケート用紙に書いたので、質問を理解できなかった人はおそらくいなかっただろう。しかし、アンケート対象者の半分が何も勉強していないというのは、割合的に見ると、著しく多い。それにしても、「勉強している」と答えた27人中、10人が「週に1-5時間」と答えたので、していると言ってもあまり勉強をしていない人が多いことが分かった。

「何の勉強をしているか」もアンケートで訊いた。対象者の中で大学生が多かったため、所属している学部の専門分野を勉強している人が一番多かった(16人)。就職資格や他の言語の勉強をしている人も10人と、かなり多いことが分かった。

2. 2 「勉強していない」のはなぜか

アンケートで、「常に何かを勉強しているか」を質問した。「していない」と答えた人が意外に多かった。その理由を詳しく日本人に尋ねた。大学の入学試験に合格するため、試験の前は、一生懸命勉強しているようだ。試験に受かれば、大学に入学後勉強をしなくなる学生が多いらしい。それは、日本の社会における知識を増やす方法に対する見方に関係

があることが分かった。大学の入学試験をパスしたということは十分に勉強ができ、優秀であることの証拠になるようだ。従って、学生は大学に行っている間に、頻繁に勉強するように要求されないで、あまり勉強していない学生が多いらしい。

またもう一つの面白い点が見られる。大学に行っている間に、勉強をあまりたくさんせず、かわりに部活やサークルに参加した学生の方が、卒業して就職しやすいという利点がある。なぜかといえば、部活をしている学生は、対人関係を良好にする術を持ち、社交性や根性が備わっているため、そういった学生を日本の企業は求めている。日本の社会は大学のことを勉学よりも、人間性を磨く場所として見ているようだ。つまり、より社会的な人間になるために、勉強をあまりせず、本格的に部活やサークルに参加する学生が意外と多いということである。

3. 仕事

このテーマについては、アンケート回答用紙で、質問「3」にした。調査のサンプルに仕事をしていると答えた人が一人しかいなかった。データがないため若者の生活のこのところは有意義の分析が不可能。

4. 倶楽部活動とサークル活動

4. 1 概観

このテーマについては、アンケート回答用紙で、質問「4」にした。様々なスポーツ、音楽、趣味などを学校や大学のサークルかクラブでやっている学生は少なくないであろう。

誰がやっているのだろうか？簡単に言えば学生がやっている。教育機関以外のところに似たような集団もあるが、それに所属している人の数が比較的によくはない。社会人は基本的に学生より時間が少ない。仕事、あるいは家族などへの責任があるし、暇なときは疲れている。それに学校外のクラブはかなり高い有料なのが殆どであるため、学生でない人はあまり参加しないのが事実である。大学を卒業したら部活をも卒業するという考え方もある。

学校にこのようなクラブが多い理由がある。学生が常に皆で何かお互いに好きなことをしたらより早く仲良くなれるし、人間関係のコミュニケーションがうまくなるという教育的な結果がある。特に体育系のクラブは近代に見る若者の運動不足と不健康なライフスタイルという社会問題の対策の一つともなる。だから学校はサークルやクラブ活動を十分に提供するように動力し、多くの学生が参加するように促している。

学校や大学の情報書を見るとたくさんのサークルとクラブの説明が書いてある。種類はところによって違うけど次のようなのはだいたいどの大学にもある。

体育系：スポーツ。特に野球、サッカー、テニス、バスケット、バレーボール。後は卓球、ラグビー、アメフト、ラクロス、陸上など。武道、例えば柔道、剣道、空手。

音楽系：あらゆるスタイルの音楽サークルがあるが、当然当時の流行が多い。基本的に大人数の同好会と限られた人数のバンドの二つがある。一つの楽器か音楽のスタイルが中心となっているものもある。

文化系：茶道、生花、折紙などの伝統的なもの。またはダンス、手芸、美術。

その他：コンピューター同好会、車クラブ、国際交流などのカテゴリに入れにくいサークル。

4. 2 部活の特徴

もちろんこのような中心的に計画した集団活動は日本に限って行われるものではない。でも日本の場合には幾つかの面白い特徴がある。

クラブかサークルに入る理由は入る人と同じほど多い。でも多くの場合は友達を作りたいという希望が入っているであろう。大学生の半分以上がまだ酒を飲めなかったり、ディスコとかで集まらなかったりする日本では、確かに部活が仲間を作るところとして更に大切になる。これは日本の教育機関に部活が多い原因の一つと考えられる。ヨーロッパの国々の大半では飲酒の許される年齢は大学に入る年齢と同じ、若しくはそれよりも若い。そのような国では社会人と同じく酒場で集まって交流する。一方クラブ活動に参加する人はあまりそのクラブの仲間と一緒に遊ばない傾向がある。

日本で部活をととても熱心的にやっている人が多いとよく言われる。これは本当にそうなのか、その差を測るのは非常に難しい。気軽でゆっくりしたペースでやっているように見える人も結構いるし、何がふさわしいかとか何がやり過ぎかは個人の価値観によって違う。それでも、特に体育系で、毎日くらい何時間も会って、休みになってもそのペースを崩さない、まわりによく「やりすぎる」とか言われるのがかなりある。逆に他の国では滅多に見ない。ヨーロッパではそれ程やるクラブに行っている者はプロを目指している人ばかり。日本ではそれからプロになる人もいるけど、そのつもりも才能もなくともプロみたいに練習する。これはもちろん日本の部員はみな過度にやっているわけじゃない。ヨーロッパの人が中途半端ということでもない。日本語の「クラブ」と「サークル」の言葉を使うならヨーロッパはクラブが少なく、サークルの方が多いと言えよ。

クラブとサークルの違いは要するに活動の程度のことである。例として広島大学の空手クラブ（広島大学体育会空手道部）と空手サークル（広島大学空手同好会）を比べよう。クラブは週6回全部で13時間練習して、休みは強化練習と合宿があって、休みと言っても平均週9時間やっている。それに対して空手サークルは通常週2回4時間やって、休み

は完全オフである。

活動の頻度だけではなく、メンバーに何を要求するかというところも異なる。サークルの人はやりたいときにやったり、休みたいときにやすんだりする。集まるときにずっと来なくても、それが自分の自由として認められる。それにサークルの中では、上下関係を強調していない。

クラブの方はもっと厳しい。出ないと何かのペナルティーを受けるか、少なくとも先輩に注意される。この固い制度に性格が合わなくて辞めてしまう人が毎年現れる。

最後に、日本のクラブに必要な仕事は全部部員が自分達でやる。道具の購入、部費の管理、試合の申し込みなどの役割がわり当てられる。それぞれの担当者がいて、次の年にまた新しい人がその責任を引き継ぐ。普通は1年生か2年生がこのような仕事をする。全く同じ教育的な考え方が日本の学校給食と放課後掃除などに見える。ヨーロッパのある国の場合はこれを全部クラブの管理者がやっている、別の人の責任になっている。その人は普通は学生でもない。クラブの使う施設の関係者が多い。

この2つの点は間違いなくそれぞれの社会で尊重される主義の違いに基づく。集団主義の日本では個性を犠牲にし、集団に忠誠を誓い、そして集団のために働くという考え方はたくさんの厳しい、部員管理制度のクラブを生じたのではないか。個人主義の進んだヨーロッパのクラブ活動では部員の平等と自由が重視され、絆の薄い束縛しないようなクラブができていく。

4. 3 部活における連帯感

アンケートで「部活動やサークルなどに参加しているか」を質問した。「している」を答えた人が圧倒的に多かった。なぜ参加しているかを日本人に更に尋ねると、様々な面白い面が見えるようだ。それぞれの部活やサークルにおけるアクティビティーに興味を持つ他にも、参加している理由があることが分かった。

一つの理由は、日本人が持つ連帯意識に関係があるようだ。日本人は連帯感を大切だと感じ、そのため個人性より集団性を尊重している。組織や集団などに所属したいという気持ちがある、大学で部活動やサークルに参加する人が多い。従って、それぞれの部活やサークルにおけるアクティビティーに興味を持つことより、連帯感を得るために、参加する人が多いらしい。

部活のメンバー間における集団心理について日本人に尋ねると、さらに面白いことが分かった。集団に所属していると、メンバーは全員一人一人平等に扱われるので、連帯感を持てるようになっている。しかし、一人一人のメンバーは個人的に要求されることがある。つまり、集団にいる時、個人は他のメンバーと同じように行動し、反応するべきであると

いう考えが見られる。皆が盛り上がる時に、メンバーとして、自分もそれに対応し、盛り上がらないと変に思われる。それを精神的につらく思う人がいるようだ。

5. 遊び

このテーマについては、アンケート回答用紙で、質問「5」にした。若者は遊ぶ。これは代々変わらない事実だ！20代はやっぱり一番遊びたい盛りだ。友達と遊ばないと答えた4人は多分非常に忙しい人か、質問を理解しなかった。

平均の遊ぶ時間は週11.5時間くらいだが、16時間以上遊んでいる人が20人に達して、一番多かった。

若者はどのようなことごとくをして遊んでいるかというところ、それはかなり限られているみたいだ。カラオケと飲酒、喋ることの3つはほとんどの人が答えた。それ以外に食事とビデオや映画を観ることと、ビリヤード、ボーリング、テレビゲームをすることも多かった。

日本の若者の遊びの習慣は時間的にも、内容的にも他の国の若者とそんなに異ならない。一つだけ目立つ違いはカラオケの人気である。飲酒と喋ることと並んでカラオケが「普通の遊び」のように考えられている。これはさすがにカラオケを発明した国だ。多くの国では特別な興味をもっている人がするけれど、一般的な遊びとは見られていない。

6. 買い物

このテーマについては、アンケート回答用紙で、質問「6」にした。「買い物をしているか」という質問に、対象者全員の中で、一人を除く、53人が「している」と答えた。更に、「どれくらい買い物をしているか」を尋ねると、次の答えが出た。

「食料品や生活に必要な他のものを買うため、週に何時間かけているか」という質問に、53人中、「週に1-5時間」と答えた人が一番多かった(40人)。12人が「週に6-10時間」と答えた。一人だけが「週に11-15時間」と答えた。

「自分のためのものをどれくらい買うか」を訊くと、53人中、「週に1-5時間」と答えた人は48人がいた。「週に6-10時間」と答えた人は5人だった。

自分のための買い物は、本、雑誌、音楽、服という四つのものを買うという答えが圧倒的に多かった。

6. 1 食文化

「買い物しているか」をアンケートで訊くと、頻繁に食料品を買う人は当然多いようだ。日本の若者の食生活はどのようになっているのか、食文化はどのような影響を与えているかを自分なりに考えた後、日本人に尋ねた。

日本の食文化はものすごく豊かだと思う。それは自分達の国々の食文化と比べて、わかったことである。ある国の食文化に第一に影響を与えるのはその国の地理的な場所である。日本の場合、地理的な条件によって、四季がはっきりしている。季節が変わるたびに、手に入る食物も変わるだろう。従って、季節ごとに、色々な食べ物が採れるだけでなく、それぞれの季節に様々な行事、例えば、秋の紅葉狩りや春の花見などを行うし、こういうことから日本人が四季を楽しんでいるということが分かる。自然の無常を感じ、日本人は四季の移り変わりとともに生きていると言えるだろう。それゆえ、食文化も当然ながら、多彩になっていくのだろう。

食文化は社会的にも他の様々な面に大きな影響を与えられられる。そういった面の一つは日本のテレビ放送に関係があるということだ。僕たちが日本に来て、気になり、不思議に思ったことは料理番組がものすごく多いことである。テレビをつけたら、最近できたばかりのフランス料理屋のシェフが作ったごちそうを試食させてもらった美人レポーターの満足そうな表情、あるいは家庭のキッチンのように作ったセットの中で素人っぽく慣れない手つきで魚の調理などを行っている、エプロン姿の女性が毎日、いつでも見られるのではなからうか。なんでこんなに料理番組が多いのか、こんな風に料理がサブカルチャーのようになったのだろう。それもやはり四季の変化と関係があるのではないだろうか。テレビの視聴者の季節感や興味の対象が料理番組を作る時、アイデアの種になるのだろう。

しかしながら、こういった面から見た食文化と社会のつながりは社会に悪影響を与えているように見える。料理番組は圧倒的に日本全国の主婦を対象としているようだ。こんな風にしてしまうと、料理や色々な家事は一層、女性の仕事として見られるようになってしまいうし、男性と女性の地位の平等を達成するのは更に難しくなるだろう。つまり、料理番組には望ましくない、社会的にマイナスの意味があるということだ。

それについて日本人に尋ねると、更に面白い点が見られる。日本の食文化において、マスメディア以外にも男女の平等を達成するのを難しくする点があるようだ。女性が家事に時間を長くとられるのは、料理の作り方や飾り方、作る順番が大きく影響しているようだ。それらの準備のために時間がたくさん要るらしい。自分達の国々と比べると、特に日本の場合、**「ファーストフード」**や出来合の料理を家族と一緒に家で食べる習慣があまりないようなので、キッチンで作られた料理を暖かい内に食べるとなると、料理の準備には時間が必要である（最近では出来合の料理を買ってきて、暖めて、食べる家族も増えてきたようだが）。それにしても、食卓の上の料理の盛りつけ方において、料理には様々な種類があるため、それぞれの種類は一つの皿に装うのではなく、皿がたくさん使われるのである。つまり、料理を盛りつけるためにも時間がかかり要るらしい。皿がたくさん使われるため、食事の後には、洗う食器がたくさんあり、それにも女性は時間がとられるのである。この

ように、女性の仕事に見られている家事は料理の他にもたくさんあり、男女の平等を達成するには、社会的に見て、様々なマイナスの要素が見られる。

7. のんびり

このテーマについては、アンケート回答用紙で、質問「7」にした。「のんびりする時あるか」を質問した。54人中、それに「ある」と答えた人は大多数48人で、「ない」と答えた人が6人だけだった。「のんびりする時がある」と答えた48人中、「週に1-5時間」をのんびりする人が6人、「週に6-10時間」と答えた人が9人、そして7人が「週に11-15時間のんびりする」と答えた。しかし、「週に16時間以上」のんびりする人が一番多く、24人だった。「週に何時間か」を詳しく訊くと、その24人中「毎日、もしくは、ほぼ毎日、週に合わせて20時間以上」と答えた人が著しく多かった。

アンケートの結果によって、のんびりする時間がたくさんある若者が割合的に多い。「2」に挙げたように勉強する人が少ない傾向にあることとのんびりする時間が多いということは、少なからず関係があるようだ。つまり、若者は勉強をせず、のんびりしたり友だちと遊んだりすることが多いというパターンが顕著に見られる。

8. 自分の日常生活の感想

8. 1 概観

「現在している生活でもっとしたいこと、し始めたいことはあるか」または「現在している生活でしたくないこと、満足していないことはあるか」と質問すると、様々な答えが出た。「満足していないこと」では、「恋愛の問題」、「アルバイトに時間がとられること」、または「食生活」という答えが一番多かった。

「し始めたいことはあるか」では、「自炊」や「運転免許をとりたい」という答えがあった。アンケートの中の「勉強」の項目では、「勉強はしていない」と答えた人が、「生活でもっとしたいことあるか」という質問では、「勉強をもっとしたい」と答えていて、それはおかしいと思った。

8. 2 外国に興味がある若者

しかし、「自分の日常生活の感想」についての答えによって、外国に興味を持つ日本人の若者が非常に多いことが分かった。「生活でもっとしたいことはあるか」に対する答えから、もっと外国語、英会話を勉強したい、あるいは、TOEFLなどの留学するための英語能力をはかるテストの勉強をしたい人が多いらしいことが分かった。それについて日本人に尋ねた。外国に興味を持ち、留学する人が増える傾向にある現代は、否定的側面も持っているよう

だ。それは日本の企業の若者に対する雇用に影響を与えている。つまり、日本の企業は、留学経験のある若者を雇わない傾向がある。なぜかといえば、留学すると外国の考え方や社会の習慣に馴染み、日本の企業や社会に合わなくなってしまうため、留学していた若者を雇いたくないということである。そのため、日本の学生をできるだけ留学させないように日本の社会がしているようだ。イコール社会の閉鎖性を強めることになる。

・日本人の若者へのインタビューによって分かった他のこと

1. 対人関係

一年間で、アンケート調査を行ってきた他にも、僕たちは二人とも日本でアルバイトをしたこともあり、日本人と接する機会がたくさんあった。日本の社会における対人関係のイメージと、実際に経験し感じたことが研究の動機となった。

1. 1 敬語

日本語を勉強し始めて、すぐ接したのは、当然ながら、日本語における敬語である。僕たちが大学で日本語を勉強するにあたって、同じ教科書を使ったわけだが、まず第一に学んだのは敬語であった。つまり、日本の社会において、敬語は重要な地位を占めており、マスターしなくてはならないものであることを学び、理解した。僕たち二人は日本語を勉強し始めて四年目だが、敬語の使い方の難しさをよく分かっていて、今でもうまく使えない場合はもちろんよくある。文法的な問題よりも、いつどんな場合、誰と話すかというタイミングが敬語を使う時の本当の難しさや複雑さだと思う。それはこの研究の結果によって、日本人にも時々難しいということがわかった。

敬語は言葉だけではなく、様々なことと関係する。視線、うなずき、イントネーションなども表現に大きな影響を与える。これを全部うまくコントロールできるようになる人はほとんど日本語が母国語の人しかいないだろう。日本人とのインタビューの結果によると日本人でも敬語における尊敬語や謙譲語の使い分けが難しいということだ。特に、感謝状など、敬語を文面に表したりするのが日本の若者にとって難しいらしい。日本人にとっては親に厳しく躰られないかぎり、敬語は常識のようにだんだんと身に付いていくものであり、先生や教授しか敬意を払う相手がいない、社会に出ていない若者にとっては難しいということである。アルバイトをすると客に敬語を使わないといけませんが、たまに尊敬や謙譲を間違ったりするらしい。自分では敬語を使うのが面倒だと感じて、やっぱり年上の人や上司に敬語を使わない、口の効き方を知らない若者を見ると腹がたち、改めて敬語を使う重要性と、敬語が日本の文化の美德であると感じるそうだ。

上記のように、時と場合、または相手が誰かによって、敬語を使うか使わないかという

問題が日本語を学ぶ外国人にとって最も難しいことである。丁寧な言葉だけを使うと親しみが感じにくいので、日本人の友だちを作りたいと思えば、丁寧な言葉だけではなく、普通の言葉も使えるようになりたいのが当然なことである。だが、丁寧に話すべきである場合に普通の言葉を使ってしまい、恥をかいたり変な顔をされた経験は、日本語を勉強している外国人には、誰にでもあるだろう。

しかしながら、外国人にとっては日本語の能力のレベルにさほど関係なく、日本にいるといつも外国人として扱われるので、敬語や普通に話すことを完璧にコントロールできなくても、社会においては許されるであろう。だから、外国人にとって、言葉の問題は限られている。誰と話してもどんな場合でも丁寧か普通かはそれほど問題にならず、自分の言いたいことを言葉で表すことができれば、よいだろう。

上記のように、敬語は言葉だけではないのである。だから、普通の言葉を使っても、丁寧に聞こえるような話し方もある。それは声を出す力の調節やイントネーションに関係あるものである。イントネーションにおいて高い声で話すと自然と丁寧に聞こえる。従って、声を出す力の調節によって言葉に思いやりや優しさを込めることができる。

1. 2 冷たく感じる敬語

敬語を使うのは、丁寧さや思いやりを表現したいための言い方だが、敬語には逆効果があることもよくあるらしい。インタビューの結果によって、特に海外に留学していた日本人は日本で使われている敬語に対して、マイナス思考が多いようだ。彼らは敬語を使うことは思いやりを表すというよりもむしろ、冷たさや無責任を表すと感じるが多い。敬語の弱点は人と人の間の心理的な距離を遠くしてしまうことである。その行動をとることは冷たさや無責任が感じられ、「丁寧すぎる」ことは「気持ちが悪い」とインタビューの対象者が言った。

自分たちの経験でも同じように感じたことがある。例えば、店に行った時に、店員にもすごく丁寧に声をかけられると、優しさを感じるというよりもむしろ、自分が何か悪いことをしたのか、といやな感じになることがある。確かに客が第一という日本の考え方も分かるが、客が丁寧に扱われることで、心地よさを感じるには限界がある。客がその限界を越えてしまうと、店員が客に対してよかれと思って行ったサービスは完全に逆効果になってしまう。確かに店員が客の気持ちを考えず、その会社のマニュアル通りの接客をしているという無責任さを感じる。客に対して、来店の感謝をしつこく言えば、客との間に距離ができ、自分から話しかけない限り、客から質問されたり、私的な空間に入る必要はない。その接客の目的と客が実際に感じるものは根本的に矛盾してしまう。それは社会に大きな悪影響を与えていくのであろう。対人関係において人と人の間に距離が生じ、人づき

あいが消極的になり、他人に自分の本心を言わない人間がうまれる。官僚制に統制されやすいこういう人間が増え、日本の閉鎖社会化を進めていると思われる。

1. 3 謝り「ごめんね！」

あまりにも「ごめんね」、「ごめんね」と連呼されると自分が悪いことをしたかのような気持ちになり、不愉快な気分になることがある。自分からするとちょっとしたことなのに、なぜ何度もいうのかその感覚がよく分からない。「ありがとう」と「ごめんね」がごちゃ混ぜになっているのも気になる。「ありがとう」というべき場面で、「ごめんね」と言ってしまう日本人が多い。おそらく日本と僕たちの国々の文化におけるあまりにも大きな違いのせいかもしれないが、感謝すべき場面で謝るような言い方をされると不愉快な気分になることが多い。感謝をしたい人に対して、「ごめんね」と謝ることは、自分の地位を相手より低くすることである。相手に対して、謙譲を表すため「ごめんね」と言って表現することは、それは僕たちにとってとても微妙である。その場合、謝る人がむしろ何かを隠し、本心を明かしていないという感じがする。謝る本音が違ふとすれば、自分の地位を低くするためではなく、相手より心理的に自分を優勢に立たせようとしているふうに感じられる。感謝すべき場面でなぜ謝るような言い方をするのかについて日本人に尋ねた。日本の文化の独自性は日本語やその使い方に大きな影響を与えている。つまり日本の文化は、次の節に挙げるように思いやりや遠慮を大切にする文化であるから、相手が自分のことを思いやってくれた好意に対して、自分がそれを意図していたかしていないかにはかかわらず、迷惑をかけたと自分が感じたことから謝罪のニュアンスが強くなり、謝るのではないだろうか。つまり「(迷惑をかけて) ごめんね。」という表現になるのだろう。

1. 4 遠回しな表現

相手に物事をはっきりと言わず、よく遠回しな表現を使うのは日本人の独特の性質である。きちんと断らず、うまいいいわけを作れるのも日本人の特技である。相手を傷つけない、または相手の気持ちを害さないための手段であるので、人間関係における高度な技術とも言えるだろう。しかし、それには否定的側面もある。僕たちにとって、日本人があまりにも遠慮しすぎると、それには消極性が感じられ、気になることが多い。僕たちにとって、物事をはっきりと言われるのは自然に感じ、誤解にならないよう遠慮なく物を言ってくれるのは好ましい。日本人が本心を見せてくれず、不愉快な気分になることが多い。遠回しな表現は日本の文化に深く組み込まれているようであり、なぜそれを使うのかは日本人にも説明しがたいことだとわかった。

2. 日本人の若者が使っている方言

日本の諸方言が標準語（佐藤和之、米田正人『どうなる日本のことば一方言と共通語のゆくえ』によると標準語は、地域性を反映したお互いに通じ合えることばということだ）とどのように違っているかを僕たちの国々と比べると、かなり異なっていることが分かった。日本の場合、例えば百年前を考えてみると、方言は、ことばのアクセントの位置の違いではっきりと区別ができ、南から北に及び、方言はたくさんあったようだ。日本語においては戦後の生活の西洋化、様々な変化や現代のテレビ放送の影響で、方言の本質が変わったようである。現代の日本語の単一化はマスメディアの多大な影響によるもので、標準語が全国的に広がっている。従って、現代では、「方言」と言えば、その言葉の内容は前と比べると、違ってきている。方言によって、発音的な違い（アクセントの位置やストレス）はあまりはっきりとせず、主に文の最後に付ける助詞で区別ができるようだ。例えば、広島弁の「へけえ」、大阪弁の「へへん」や「へねん」、九州弁の「へと」などはそれぞれの方言の特徴になっている。

僕たちの国々では、方言と言えば、内容はかなり違う。それは方言によって言葉の発音が違っていることである。綴り方が同じでも、特にアクセントの位置やストレスで方言が区別できる。ある地方で育つと、その地方による方言を話し、その方言を身に付けるというわけである。そして、別な方言で話そうとし、うまくできないことが普通である。または、方言のなまりを消そうと、標準語を話そうとしても、とても難しい。

日本語の場合は違う。例えば、普段大阪弁で話す人が敬語を使いたい時や丁寧に話したい時は、標準語にスイッチし、うまく話せることが普通である。つまり、通常日本人は話す時に、自分の意志で、普段話す方言をうまくコントロールできるということだ。

これについて日本人に尋ねた。方言は個性であり、アイデンティティの一部だと考えられる。というのも自分が無意識に方言が出てしまった時に、どこの出身か聞かれたりして恥ずかしいけど、なんだか自分のことを少し理解してくれたような気がしてうれいらしい。しかし、上記のことは方言と標準語の差があまりない地方の出身者が言っていたことで、差が大きい地方出身の人はなるべく標準語を使い、方言を隠そうと努力することが多いようだ。その他にも、東京に行くとどの地方の人でも、大方標準語を話すようになるらしい。やはり日本人の頭の片隅には田舎ものは格好わるいという固定観念があるように思われる。また、標準語は何かしら冷たく、素っ気なく聞こえるが、方言は暖かみがあり、親近感が湧くのは否めない。「郷に入っては郷に従え」とあるように、人にとって、住んでいる土地の風俗、習慣に従うのが人間関係をスムーズにする方法であるゆえに、その土地その土地の方言を使うのが処世の術ではないだろうか。

・日本における若者に関する社会問題

アンケート調査の最後に生活の感想を聞いた。インタビューでも若者に関係のある社会問題について述べて貰った。その中で幾つかの面白い発言があった。問題があるという意識は確かに高い。ある意味では高すぎる。たくさんの人の回答から分かったのは実態より問題が多くて、深刻な程度であるとの誤った認識を持っていることである。例えば少年の凶悪犯罪事件（人殺しなど）は毎年倍に増えているとか、麻薬の使用者はある学校の生徒の10%まで上っている、不登校は医学的な病気で精神科の治療を受けて治せるなどの意見を聞いた。インタビューした若者はこうした社会問題に対する感心を持っているが、ヒステリアに近い心配と恐れを抱いているようだ。これもマスコミのセンセーショナルリズムとちゃんとした教育の不足のせいではなかろうか。しかし、各問題の程度が実際より酷いと思いながらも、ほとんどの人は下記のような問題が身近に起こっていることを断然に拒否した。「麻薬や援助交際などに巻き込まれている知り合いがいるか？」と聞かれたら一人も「いる」と答えなかった。だからこのよく持たれている非現実的で最悪なイメージは新聞やテレビのドキュメンタリーを見て作られたものだと思う。自分のまわりの人は運が良くて関係ないけど、見えないところで全部が駄目になっているような意見は少なくなかった。これ自体が大きな社会問題ではないだろうか？

このレポートの第二の目的は社会問題と若者の関係と現状を明確にすることだ。どんな社会でも問題点がある。特に日本みたいな短期間に劇的な変化が起こり、今でも変わりつつある社会は問題が多いかもしれない。若者とその社会との接し方、社会の中の居場所、次の時代の未来などに関連する問題も少なくないだろう。日本の場合は問題が他の先進国におけるのと違うかと言うと、殆ど変わらない。しかし独特なところのたくさんある日本の社会には幾つかの独特な問題も当然ある。

近年、よく若者に関連した社会問題の話が耳に入る。そして聞けば聞く程人々の問題意識と関心を高めている。しかしマスコミがセンセーショナルリズムのためにこの冷静で考えるべき問題の議論に油を注ぎ、一般の人に届いた情報が最悪なイメージを作ってしまう。その結果、大概の日本人は「今時の若者だめだな」などと聞く度にそれが本当かどうかを疑わず、残念な事実とってしまう。そこから先入観を持ったり、この問題を生じた社会までがだめだと決めってしまったりする。多くの場合は問題の一番重要な原因は社会全体にあるのでも、若者だけにあるのでもない。だから「早く社会の仕組みを革命しよう」などの過激な手段を取ろうと声をあげる人は解決に役立たない。その前に徹底的に問題の実態を理解することが大切ではなかろう。

若者達を責めることは愚かである。好きで問題を起こしているわけではない。むしろ問題の被害者になっている。日本は昔から老尊若卑社会だった。多少変わったとしても、今

でもその影響が大きい。従って若者はより苦しんでいる。日本の社会と思想は中年以上の人の問題を優先的に扱って、若い人を無視しがちとでも言えるかもしれない。

次の1から7はアンケートの回答とインタビューに出てきた発言、コメントに基づいたものである。

1. 少年犯罪

未成年の間の犯罪事件回数が少し増えたが、それだけだったら大した問題ではない。もっと心配すべきなのはその犯罪の手口が酷くなったことである。凶悪犯罪の恐ろしい事件が相次いで起こっている。暴力、人殺し、拷問などの依然考えられなかったことを少年や少女が犯している。もっともこのような凶悪な事件のほとんどは動機が薄い、もしくは全くない。強いて聞かれても少年犯罪者は「好奇心」や「むかついた」みたいなことしか言えない。

原因はよく学校生活のストレスと若者に孤独感を与える社会の厳しい期待と言われる。しかしこの問題の規模はもっと狭いものだと思う。少し増えたとしても実際にこのような罪を犯す人の数は少ない。その中でも9割がもともと精神的な欠点のある人ではないか。社会の問題よりこれは何人かの個人の精神的な問題かもしれない。

2. 引き籠もりと不登校

最近の社会問題の中でも最も深刻で注目されているのは不登校とそのより酷い程度の引き籠もりかもしれない。これは登校恐怖症とも呼ばれ、要するに学校に行くことが嫌になる精神的なことである。よく病気と思われるが実はそうでない確かな証拠があった。

引き籠もりをそのままにすると対人シチュエーションと人間関係が辛くなり、身内でも他の人間と顔を合わせるのが出来なくなる。そして日常生活すらもできない。一番残念なケースは自分の部屋に「引き籠もって」、何年も外の世界と接しない。長期ではもちろん本人の教育と成長を困難にさせ、親や親戚、友人を心配させる。

原因はそれぞれのケースによって違うが、幾つかの何回も出てくる共通点がある。虐めと学校生活の辛さ、勉強によるストレスなどである。特に受験のときは一番危険と考えられている。このようなことが重なり、精神に強い圧力がかかり、結局それが耐えられなくて、全てから逃げてしまうという反応をする。

近年、不登校と引き籠もりの数が多少増えたのは事実だが、激増状態と恐れられているのは誤解だ。新しい統計によると不登校の数が減っている。

3. 家庭内暴力

親と親戚に対する暴力も増えたらしい。原因は上の引き籠もりと少年犯罪と殆ど同じだが、貯まった不満とストレスの発し方が違う。先生への逆切れ、同級生の虐めなども似ている。

4. 援助交際

多くの若者に関する社会問題は男女を問わない。しかし援助交際は若い女性だけに限った問題だ。現代社会の消費主義とマスコミの絶えないブランド商品マーケティングはとんでもない要求を引き起こす。特に若者にファッションに従わなければいけないというプレッシャーを感じさせる。男でも感じるけれど、女の場合はこのプレッシャーの程度がとて強い。そしてブランドものが高い。学生やフリーターなどのお金では滅多に買えない。ここで問題が始まる。どうやってこのお金を手に入れるかの問題に答えて、一部の女性は援助交際というある種類の売春に身を投じる。もう犯罪になっているけれど、強制がなく、自分自身からやっているなので犯人を捕まえることが非常に難しい。

5. 公共マナーと一般常識の崩壊

半分はどこの社会にでもある若者の社会ルールに対する反乱で、半分社会のマナー思想の変化かもしれない。目立つ例をあげると落書きやうるさい携帯電話の利用などがある。

日本の社会は昔からこうした厳しいルールにこだわるところが多いが、ジェネレーションギャップがかなり大きい。従って前の世代と今の世代の価値観が違う。前の世代のスタンダードで今の人を測ったら常識やモラルに欠けているように見えるかもしれないが、それは不公平な考え方である。

6. 就職の困難さ

バブル経済の時代に高校か大学を卒業したばかりの若い人は就職の心配が少なかった。経済が苦しんでいる今は仕事を求めている人、特に若い卒業生も苦しんでいる。新しい人を採用しなくなった会社が増えつつ、就職ができて、リストラなどによってすぐ辞めさせられてしまう恐れがある。

日本の社会が中年と長年の雇用者を優先的に扱うことも、若者の就職困難問題を悪化させる。

7. 麻薬と覚醒剤

まだそれ程深刻な問題ではないが、麻薬の濫用は徐々に悪化しつつある。一番被害を受けるグループが若年層だから教育を通して、問題意識を高めるのが第一の対策であろう。

まとめ

1. 若者の生活様式

アンケート調査の結果によって、大多数の若者の生活様式が見てとれる。一般的な若者は次のように考えられる。まずは飲食系か販売系のアルバイトを週に15時間していることがわかった。アルバイトをしている理由は何かといえば、学費、生活費が高いため、お金が稼ぎたくて、「アルバイトの給料が不満」や「アルバイトをもっとしたい」などというふうにアルバイトにこだわっている。アルバイトは一般的な若者の日常生活の中で、最も大切なものであることが分かった。

そして、勉強にあまり興味がなく、勉強をする習慣は全くないか、最大毎日平均一時間勉強をしている若者が一般的だということが分かった。なぜ勉強していないかといえば、第一に日本の社会における知識を増やすための方法に関係がある。大学生の場合は、大学の入学試験を合格したということは、十分に勉強ができ優秀であることの証拠になるようだ。従って、大学に行っている間に、頻繁に勉強をするように要求されない。または、勉強をあまりたくさんせず、かわりに部活やサークルに参加した学生の方が、卒業して就職しやすいという利点があり、部活やサークルに参加しているということも一般的な若者の生活様式に当てはまる。

週に16時間以上、体育系の部活やサークルに参加している若者が普通であることが更に見られる。参加する理由と言え、第一に友だちをつくりたいということである。また日本における集団主義が大きな影響を与え、原因になるということが分かった。

一般的な若者の日常生活における友だちとの遊びははっきりしたパターンが見られる。カラオケや飲酒やお喋りをして、友だちとほぼ毎日遊ぶのは普通だと分かった。

生活における買い物は、食料品や生活に必要な他のものを買うために、週に1-5時間かかるのが一般的だ。自分のためのものを買うのに週に何時間かかるかといえば、およそ一、二時間が普通である。自分のために何を買うかという、本、雑誌、音楽と服という四つのものが一般だということが分かった。

週に16時間以上のんびりするのが一般的であり、上記のことにつなげて考えてみると、若者は勉強をせず、のんびりしたり友だちと遊んだりすることが多いというパターンが顕著に見られる。

自分の日常生活における感想についても一定のパターンが見られる。「満足していないこと」は「恋愛の問題」、「アルバイトに時間がとられる」や「食生活」ということが普通のような。「もっとしたいこと」は「勉強をもっとしたい」という答えが一般的に見られる。何の勉強をしたいかといえば、外国語、英会話を勉強したい、あるいは、TOEFLなどの留学するための英語能力をはかるテストの勉強をしたい若者が多いことが分かった。

2. 若者に対する社会問題

インタビューとアンケートを行ったときに若者と接して、やっぱり強く感じたのは社会への心配と問題への関心だった。確かにIVに書いたような望ましくないことが日本の社会に危ない影響を及ぼしている。しかし各問題に対する意識、認識が足りないと思う。これは特に若者自身の間に見えるが、上の世代にも正確な情報が届いていないようだ。原因を理解して効果的な対策を考えるより、たくさん的人是は誰かに責任を取らせようとしている。この誤った考え方は改めた方がよい。または事態を理解した上でそれぞれの問題の中から一番深刻で一番影響のあるものとそれ程深刻ではないのに分けて、集中的に立ち向かうべきだろう。

おわりに

アンケート調査の結果をレポートの主な題材にしたことには、欠点があるということが分かった。それは、正確な結論を出すために、対象者の人数が足りなかったり、質問が適切ではなかったりすることがあり、非常に難しいからである。僕たちの場合は、レポート調査の対象者における欠点があった。まずは人数が少なく、合計54人だった。もっと正確な結論を出すためには、できるだけ多くの人にアンケートに答えてもらう必要があるだろう。100人くらいが妥当な人数であり、正確な資料を得ることができると思う。また機会があれば、今回より大規模な調査を行いたいと思う。

対象者がほとんど大学生だったため、結論で、「一般的な日本の若者」といったが、「一般的な日本の大学生」の方がふさわしい表現であり、そこが紛らわしく思われる。またアンケート調査を行うならば、対象者の年齢や身分の範囲を更に広くしてみたいと思う。

「常に何かを勉強しているか」という質問はアンケートの中の一つだったが、その質問はもっとも誤解しやすいということが分かった。この質問中の「勉強」という表現には、大学での勉強が含まれていないという風に思った人がいたようで、たまにふさわしい情報を得ることをできなかった場合があった。

上記のように、対象者はほとんど大学生だということから見ると、「仕事をしているか」という質問に対して、答えはほとんど全員が同じように、「していない」だった。大学以外の人にもアンケートを配れると思ってそういう質問をつくったわけだが、仕事をしている人は一人しかいなかったため、その質問の重要性はなくなったように考えられる。大学生以外の仕事をしている若者はどんな日常生活をおくっているか、機会があればもっと調べたいと思う。

買い物についての質問の仕方はふさわしくなく、的を得た答えを対象者から導き出すことができなかったようだった。「自分のために何を買うか」という質問をし、「服、CD や雑

誌など」というふうに例を挙げた。結局その質問に対しては、挙げた例と全く同じように「服、CD や雑誌など」と答えた人がかなり多かったため、正確な情報を得たかどうか分からなくなり、疑問が残る。

アンケートの対象者に、できるだけたくさんの情報を書いてもらいたいという気持ちは当たり前のことだが、たくさん書いてもらえるように、どんな質問をどのようにすればいいかなどを理解するのは、かなり難しいということが分かった。また機会があれば、本質的な質問をうまく考え出せるよう、どのように質問すればいいかという技をまず身につけてから、アンケート調査を行いたいと思う。

参考文献

石塚雅彦『若者と社会の実態』日本外交メディアセンター、1995

佐藤和之、米田正人『どうなる日本のことば一方言と共通語のゆくえ』大修館書店、1999

平野雅章『日本食文化考』東京書房社、1986

藤本卓『登校拒否と不登校』教育出版株式会社、1993

アンケート回答用紙

アンケートに答えていただきありがとうございます。この調査の結果は僕たちが書くレポートの重要な題材となりますので、正直に答えていただくよう、ご協力をよろしくお願いします:-)

Carl-Jiro Lock, Gavin Poffley 広島大学、留学生センター、2002/2003年
適切な答えに○をつけるか、またはふさわしい情報をお書きください

個人的な情報

年齢 16-18、19-20、21-23、24-26、27-30

性別 男 女

身分 高校生、大学生、大学院生、仕事、フリーター、無職、その他

血液型 A AB B O

出身地

あなたの日常生活についての質問

A. 具体的に内容を書いてください

B. どれくらいですか？（頻度・週に約何時間）

自分の日常生活の感想

あなたが現在している生活でもっとしたいこと、し始めたいことはありますか？

あなたが現在している生活でたくないこと、満足していないことはありますか？

アンケート調査の結果

対象者の全員数：54

年齢の範囲

16-18：0

19-20：35

21-23：14

24-26：4

27-30：1

性別

男：15

女：39

身分

高校生：0

大学生：48

大学院生：5

仕事：0

フリーター：0

無職：0

その他：1

血液型

A：25

B：10

AB：6

O：12

無回答：1

1. アルバイト

している：41

していない：13

週に何時間アルバイトをしているか

1-5：6

6-10：2

11-15：18

16以上：15

アルバイトの種類

飲食：17

販売：12

その他のサービス：7

労働：0

教育：10

その他：1

(二つ以上のアルバイトをしている人：6)

2. 勉強

している：27

していない：27

週に何時間勉強をするか

1-5：10

6-10：7

11-15：4

16以上：6

勉強の種類

言語系：5

就職資格：5

学部で勉強：16

研究：4

その他：1

(二つ以上の勉強の種類をしている人：4)

3. 仕事

している：1

していない：53

週に何時間仕事をするか

16以上：1

4. 倶楽部活動やサークル

している：41

していない：13

週に何時間倶楽部活動やサークルに参加するか

1-5：9

6-10：5

11-15：6

16以上：20

無回答：1

倶楽部活動やサークルの種類

体育系：19

音楽系：9

文化系：7

異文化交流系：2

その他：5

無回答：1

(二つ以上の倶楽部活動やサークルに参加する人：2)

5. 友だちと遊ぶか

遊ぶ：50

遊ばない：4

週に何時間友だちと遊ぶか

1-5：14

6-10：9

11-15：7

16以上：20

遊びの種類

カラオケ：16

酒飲み：16

雑談：17

テレビ、ビデオ、映画鑑賞：6

ボーリング、ビリヤード、麻雀：10

スポーツ：1

食事：9

その他：8

(二つ以上の遊びの種類をしている人：20)

6. 買い物

している：53

していない：1

週に何時間、食料品や生活に必要な他のものを買うか

1-5：40

6-10：12

11-15：1

16以上：0

週に何時間、自分のためのものを買うか

1-5：48

6-10：5

11-15：0

16以上：0

買い物の種類

本、雑誌：22

服：34

音楽：15

化粧品：20

その他：10

(二つ以上の種類を買う人：27)

7. のんびりする時あるかどうか

ある：48

ない：6

週に何時間のんびりするか

1-5：6

6-10：9

11-15：7

16以上：24

無回答：2

自分の生活についての感想

次のテーマが何回かでてきた：

英語かほかの外国語を勉強する希望。

恋愛がしたい、もしくは不満に思っている。

アルバイトの給料や働いている環境が不満。

運転免許が欲しい気持ち。

今より自炊したい気持ち。